

ワン・ルームズ

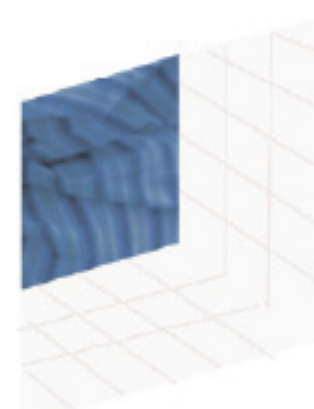
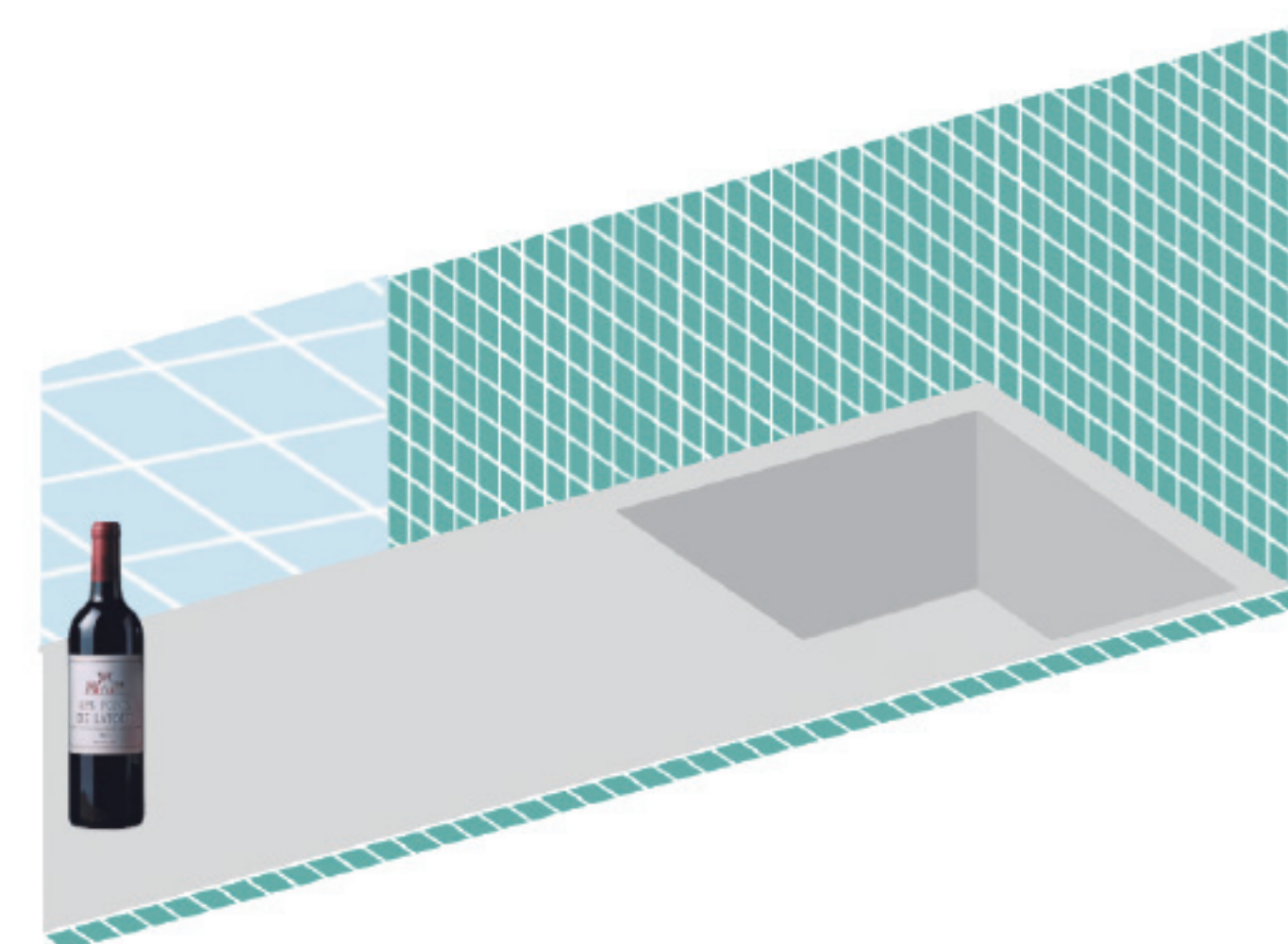
私はひとつではない。

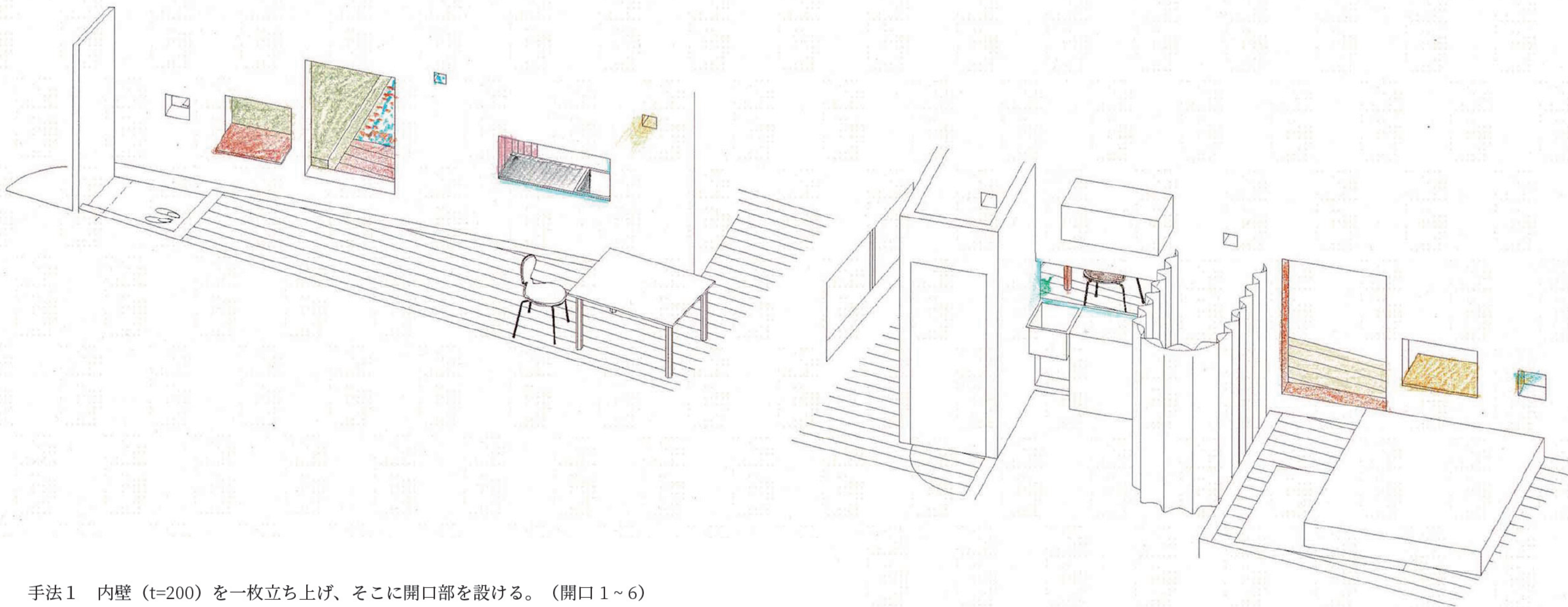
引き込まれるように小説を読んでいるわたし、難解な専門書を読んでいるわたし、電話をしながらキッチンに立っているわたし…枚挙にいとまがない。これら全てが異なるわたし、である。

ワン・ルームにはさまざまなモードのわたしが共存して、それが空間に記憶や痕跡として残ってゆく。自分の脱いだ洋服も、シーツのあとも、棚からのぞくグラスも、開け放しの戸も、、、
あれ、僕がしめ忘れたんだっけ？
あらゆる光景が記憶であり痕跡である。

ワン・ルームにおける

いまのわたしと、痕跡という他者のくらし。





手法1 内壁（t=200）を一枚立ち上げ、そこに開口部を設ける。（開口1～6）

開口はワンルームのある場所から、別のある場所が後継として切り取ってみせる。ひとつの部屋の中に重なってゆく生活の痕跡は、家を自分の身体の延長として感じることと同時に、“今”の自分を取りまく環境という意味では他者そのものである。

手法2 開口部に設備を埋め込む（開口1、2、3、5、6）

手洗い場や勉強机、照明などの設備を開口の、どちらの部屋にも属さない小口（壁体）部分に設えることによって、両側で使えるようにする。同じものが見えたり同じ機能を得るにせよ、異なる面において起こるできごとは、異なるわたし、の存在そのものである。

